

LA NOUVELLE

No.34 PRINTEMPS

東京外語仏友会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10 本郷サテライト 東京外語会気付 発行責任者 川口裕司 (1981/昭 56) 2025.4.1 発行

これまで、仏友会会報誌 La Nouvelle は A3 版の紙で発行してまいりましたが、昨年秋からの郵便料金大幅アップの状況下、今春号からは PDF デジタル版で発行し、仏友会グループメールと Facebook を通じて配信することにいたしました。紙がなくなる淋しさもある反面、画像がカラーで鮮明に見られる、動画リンクから音声ファイルにもアクセスできる、会員間の交流がグループメールで容易になる等のメリットも多々ありますので、デジタル版会報を積極的にご活用くださるようお願いいたします。投稿をご希望の方は、この会報末尾の投稿要領に沿って幹事までご連絡ください。

2024年 サロン仏友会

中村日出男(1974 卒)

去る 11 月 23 日(土)、第 29 回サロン仏友会が四ツ谷の主婦会館プラザエフで開催されました。前年までは、コロナ対策としてオンライン参加と会場参加併用のハイブリッド方式で開催していましたが、オンライン参加者の人数が減少傾向にあったため、今回は会場参加のみで実施しました。

また、コロナ以前は、秋のサロン仏友会は本郷サテライトで実施しておりましたが、サテライトで飲食ができなくなって以降は大手町サンケイプラザを利用してきました。会員の高齢化が進行する中、参加人数が思うように伸びず、会場費節約の観点から会場探しを続けていたところ、このたび主婦会館プラザエフでの開催となりました。今回の会場参加者は32名で、前年より2名増えました。

はじめに、鈴木洋美幹事(1991)の司会で、本学名誉教授の川口裕司(1981)仏友会会長より開会の挨拶と趣旨説明がありました。続いて、中村日出男副会長(1974)より、「仏友会の新しい形」の提案として、今後の仏友会運営方針について、目下幹事会で考えている内容を説明しました。

要点を挙げると、①入会の間口を広げたい、②値上がりした郵送費対策として、紙の会報誌に代えて PDF 版をメールで配布したい、③SNS やグループメール活用により会員間のゆるい交流機会を増やしたい、といった点に集約されます。川口会長からは、Facebook グループ「東京外国語大学フランス語友の会」の紹介がありました。

その後、Q&Aを経て休憩の間に、参加者の集合写真を撮影しました。

懇親会の部では、和賀千惠子副会長(1970)の司会のもと、元幹事の富山絢子さん(1964)に乾杯の音頭をお願いしました。ひとしきり懇談の後、和賀副会長の巧みなマイ

ク回しで、参加者が次々に立って1分間スピーチを行いました。今回は特に、たまたまパリから一時帰国中の沼田睦子さん(1969)にもご参加いただき、パリ仏友会の現況を報告いただきました。近年は、日本企業のパリ駐在者が減って、集まる人数が少なくなっているとのことでした。

今回の幹事会からの提案内容については、今春の総会で検討が必要な項目もあるため、 今後、会員各位の忌憚のないご意見もヒアリングしながら、引き続き会員間交流を深め ていきたいと思っています。



挨拶する川口裕司会長



参加者の集合写真



パリから参加された沼田さんのスピーチの様子

第 102 回外語祭 フランス語劇『レ・ミゼラブル』を観て

沼田睦子 (1969 卒)

昨秋 11 月 22 日、外語祭の看板催事とも言うべき 5 日間に亘る各国語劇全 28 上演作のひとつ、フランス語劇『レ・ミゼラブル』鑑賞の機に恵まれた。

今年から観覧席予約は受け付けず、観覧希望者は一作前の語劇上演開始後からアゴラ・グローバル前の待ち列に並べ、とのこと、それほどにも語劇が外語祭の呼び物となったかと、半世紀前西ヶ原校舎講堂で観劇して以来の私には眩しい成長ぶりを見る思いだった。

19年の服役後ジャン・バルジャンが出獄するナポレオン1世没落直後の1815年10月から、ルイ18世・シャルル10世の復古王政を打倒する1830年七月革命を経て、ルイ・フィリップ七月王政下1832年六月暴動の翌年、ジャン・バルジャンの死までの18年間を描く、フランス文学史上屈指の名作、ヴィクトル・ユゴーの歴史大河小説を1時間足らずの劇にどのように仕立てるのか、興味津々、観客となった。

華やかさと激しさを織り込んで、巧みな演出だった。ミリエル司教との出会い、マドレーヌ市長としての再起、ファンティーヌへの憐れみ、テナルディエ夫婦からのコゼット救済、ジャヴェールの執拗な追尾を逃れながらのコゼットとの父娘生活等の物語は、極めて簡略な小道具の暗い舞台にスポットライトの照明下、ナレーションと、詳細は削ぎ落した核心のみの台詞で進展して行く。そして突然、コゼットとマリウスが恋に落ちる場面では照明が拡がり、華やかなミュージカル劇となる。

マリウスが属する共和派秘密結社主導の七月革命の成就、そして七月王政下の六月暴動の情景では舞台全域が照明され、歌唱が躍動して三色旗が翻り、Vive la République! Vive la France! 市民たちの力強い叫びが激しく響き渡る。

六月暴動中の数々の出来事 — テナルディエ姉弟・エポニーヌとガヴローシュが鎮圧 軍の銃弾に斃れる経緯、警察のスパイとして暴徒に紛れ込むジャヴェールとその自死、 ジャン・バルジャンによるマリウスの救出等も漏らさず演じられている。

そして勿論、最終場面はコゼットとマリウスに抱かれて息を引き取るジャン・バルジャン。

『レ・ミゼラブル』はジャン・バルジャンの精神の憎から愛への変遷とその過程での 試練の物語であり、このフランス語劇で表現されている純粋な革命讃歌がユゴーの革命 観そのものであったかは議論の余地があると思うが、昨夏のパリ・オリンピック開会式 が、セーヌ川に面するコンシエルジュリー棟の数ある全開の窓辺に自らの首を持つ真っ 赤なドレスのマリー・アントワネットを並ばせ、血しぶきを降らせた醜悪極まるフラン ス革命揶揄シーンを見せられた後では、その後味の悪さを払拭してくれるような清々し さを感じた。

制作面で特筆すべきは、半世紀前には無く、いつから始まったのか、舞台両脇に写し出される読み易い大きな日本語字幕。あの字幕無しにはあれほどの観客は集め得ないであろう。

閉幕にキャスト・スタッフ全員登壇、満場観客の拍手に沸く中、私の隣席にいた仏語 科の男性フランス人教員が高らかに声を挙げた。BRAVO!

仏友俳句サロン 4

皆が見る私の和服パリ薄暑 星野立子

吉田林檎(「知音|同人)

星野立子(1903-1984 [明治 36-昭和 59])は高浜虚子の次女。父に師事し、その父の勧めで1930 (昭和 5) 年 6 月には俳誌「玉藻」を創刊した。長女の早子(のちの星野椿)を 2 月に授かったばかりの頃のことである。同時期に活躍した女性俳人の中村汀女・橋本多佳子・三橋鷹女と共に四Tと称された。

立子は1956(昭和31)年から政府の文化使節団としてインド・ヨーロッパに派遣されている。その時の作品は句集『実生』に収められており、「印度・ヨーロッパの旅」と章立てされている。

掲句はその中の一句。「薄暑」が夏の季語である。初夏の頃の少し汗ばむ程度の暑さ のことをさす。昭和に入ったばかりの日本では和服姿はさほど珍しくなかったであろう が、パリに行けば当然注目を集めたことであろう。感動を態度に表す人も多かったに違いない。「私の和服」なので和服を着ていたのは立子一人だったと思われる。それを賛美する声には誇りを感じたことであろう。満たされた心を更に熱くするその心情を、少し汗ばむ程度の薄暑という季語が受け止めている。

「佛蘭西 十四句」との前書きがついた旅吟から何句かを紹介したい。

馴染みなきパリーの町を一人涼し 此処よりのセーヌの眺め花曇 月涼しノートルダムの時計鳴る

※2 句目の「処」は句集では旧字

立子に興味を持っていただいた方は是非「鎌倉虚子立子記念館」を訪れてみていただきたい。資料や書籍も豊富で、運が良ければ長女であり俳人の星野椿さんが立子の話をしてくれるかもしれない。

※吉田林檎は江森尚子(1994/平6)の俳号です。



(Facebook フランス語友の会に掲載された Corentin Barcat 講師の記事を転載させていただきます)

10 ans de TUFS

Corentin Barcat 1月2日

Bonne année et bonne santé à tous!

Je profite de ce début d'année pour partager avec vous mon histoire personnelle avec TUFS.

10 ans de TUFS

La première fois que je suis venu à TUFS, c'était en juin 2013, et j'étais étudiant dans une école de japonais à Takadanobaba. J'y étais allé pour passer le JLPT niveau2 (examen d'aptitude en japonais). Je me rappelle simplement que c'était un peu loin de là où j'habitais à l'époque, que j'avais dû prendre plusieurs lignes différentes. J'étais alors arrivé dans une petite gare avec une seule sortie. Petite gare mais pleine d'étudiants. Pour sortir il fallait passer sur l'autre quai en empruntant un petit chemin directement sur les rails. On sortait alors dans une rue assez étroite où les étudiants se suivaient presque en file indienne. Les voitures et autres vélos avaient à peine la place de passer. Puis on s'engouffrait sous un pont pour repasser sous les rails et aboutir sur une place, puis sur l'entrée principale avec sa structure « TUFS » bien visible. Mais en vérité, la première fois que je suis venu à TUFS, je ne connaissais pas le nom des universités au Japon. J'avais mécaniquement suivi le plan qui était arrivé chez moi par la poste, puis à la sortie de la gare, suivi le flot des étudiants étrangers. Avant l'examen, je n'avais pas vraiment la tête à regarder autour de moi.

C'est presque deux ans plus tard, un peu avant la rentrée d'avril 2015, que je suis revenu. J'avais eu l'idée d'apprendre la linguistique en master. Des proches japonais m'avaient conseillé cette université. Avec la supervision de mes professeurs de mon école de japonais, j'avais contacté le Professeur Yuji Kawaguchi par mail, qui m'avait gentiment répondu, et j'avais postulé pour devenir « kenkyûsei ». Entre temps, j'avais complètement oublié l'épisode du JLPT, et sur le chemin de l'université, j'étais persuadé de venir à TUFS pour la première fois. En sortant de la gare, j'ai eu un net sentiment de déjà-vu. Si net qu'il était improbable que cela fût le fruit du hasard. J'étais certain d'avoir déjà mis les pieds sur ce campus, et c'était assez troublant! Ce sentiment est resté une énigme pendant quelques heures. C'est finalement quand je suis rentré chez moi que j'ai compris que j'y étais déjà allé pour l'examen de japonais. Même si je ne crois pas tellement au destin, finalement, j'ai pensé que j'étais peut-être un peu « destiné » à revenir à TUFS. Moi qui étais venu au Japon à un moment hasardeux de ma vie parce que mes projets de master en France ne s'étaient pas concrétisés, j'étais arrivé à Tokyo avec à peine de quoi vivre pendant 6 mois. Je pensais rentrer en France au bout d'un an. Finalement, j'étais resté, et après deux ans et demi à Tokyo, j'étais finalement entré à l'université. Pour moi, c'était déjà plus loin que le chemin que j'avais imaginé.

En entrant à TUFS, je n'avais aucune idée que j'allais en ressortir 9 ans plus tard avec un doctorat en poche et l'expérience d'y avoir enseigné environ deux ans. Pendant cette petite dizaine d'années, j'ai admiré la vue du Mont Fuji du haut du 7èmeétage, pris des photos sous les cerisiers, fait le tour des stands de nourriture du monde entier pendant la fête de l'université. J'ai bu je ne sais combien de cafés au restaurant universitaire, puis dans les dernières années dans la brasserie française en face de l'entrée principale. J'ai profité du calme du campus, rencontré des gens d'un peu tous les pays. J'ai entendu des gens parler des langues que j'étais incapable d'identifier. J'ai prononcé des sons bizarres dont je ne savais même pas qu'ils existaient. J'ai prononcé des sons du français en me demandant comment ma langue bougeait. Je me suis demandé pourquoi je parlais comme je le faisais. J'ai appris des choses que je ne soupçonnais pas sur ma propre langue. Je me suis creusé la tête pour savoir comment terminer à temps mon mémoire de master, et surtout comment commencer la première page de ma thèse. J'ai un peu stressé avant mon premier cours en tant que professeur, fait des cours en ligne en pleine pandémie devant une trentaine de caméras coupées. J'ai vu des étudiants passionnés par les langues, et j'ai aussi vu avec fierté mes étudiants faire des pièces de théâtre en français pendant presque une heure. Puis en février dernier, j'ai finalement terminé ma thèse et j'ai quitté Tokyo, car grâce à toutes ces années à TUFS, j'ai pu trouver un poste de titulaire à l'université d'Osaka.

Au total, j'aurai passé presque 12 ans à Tokyo. A bien y réfléchir, c'est un tiers de ma vie. Et pendant presque 10 ans, TUFS m'a accompagné dans mon évolution. Il s'est passé tellement de choses entre la première fois où je suis entré à TUFS et la fois où j'en suis parti après ma soutenance de thèse que c'est comme si ce campus avait vu une partie de ma vie défiler sous ses yeux. Désormais, quand on me demande quelle école j'ai fait, je réponds spontanément « Gaigodai ». Cela surprend parfois mes interlocuteurs. C'est vrai que je pourrais répondre « l'université François Rabelais de Tours » ; après tout c'est d'abord là-bas que j'ai étudié, et j'en ai de très bons souvenirs. Mais c'est avant tout à TUFS que j'ai été formé à l'étude des langues, et que je suis devenu l'enseignant et le chercheur que je suis maintenant.

(Facebook フランス語友の会に掲載された関敦彦講師の記事を転載させていただきます)

関敦彦 1月7日

東京外国語大学フランス語友の会にご参加されている皆さま、あけましておめでとう ございます。そしてはじめまして。現在東京外国語大学にて語学の非常勤講師を勤めさ せていただいている関敦彦と申します。

私は昨年の7月に博士号を取得し、現在は外語大で非常勤講師をしつつ様々な大学の

公募に応募しているところですが、結果はまだまだという感じです。

今回は私の指導教授でもある川口先生より機会をいただきまして、自己紹介も兼ねてフランス語に出会ったきっかけやここに至るまでについてお話したいと思います。拙い文章かつ、個人的な話が多分にありますが、こんな人もいるのかとご高覧いただけたら幸いです。

ところで、私は学部時代は外語大の学生ではありませんでした。以前は他大学に通っており修士課程より多磨のキャンパスに通う機会を得たのです。さらにいうと、学部時代の専攻は語学でもフランス文学でもなく、国際政治学学科と呼ばれるところに通っておりました。高校時代は社会科学系の分野に興味があったほか、英語の成績がお世辞にも良いとは言えず、そんな私に語学系の学部に進むという選択肢は夢にも思えなかったのです。

しかし、大学に入ると第二外国語と呼ばれるものが必修になっていたのです。英語すら苦手だった私にとって気の進まないものでしたが、なんとなくお洒落そうだから、フランス語の発音が身についたらかっこよさそうだから、といった理由でフランス語を選びました。

最初こそあまり乗り気ではなかったものの、いざフランス語の授業が始まると、思いのほか面白かったのです。まずアルファベからして新鮮でした。Wをドゥーブルヴェ、Yをイグレックと呼ぶのは、英語以外の外国語を知らなかった者として不思議な新鮮さを感じたものでした。さらに、文法もフランス語は英語より複雑であるにもかかわらず、個人的にはむしろ親しみやすかったのです。たとえば、英語では動詞の現在時制で主語が3人称単数の時だけ活用語尾として-sを付加しますが、高校時代の私はこのめんどくさい規則(失礼)に対して悪態をついていました。フランス語では全ての人称に対して動詞が変化しますが、ここまでくると諦めがつくのかもしれません。学習していてあまり嫌な気分にならなかったのです。そして授業内外でフランス語の学習を進めていくうちに色々なことが気になってきました。冠詞はどのように使い分けるのか?従属節で倒置が起こるのはどういう時なのか?色々と考えているうちに言語学の勉強を始めるようになり、そのうちに東京外国語大学グループによる『フランス語学の諸問題』シリーズにたどり着いたりもしたのです。

こうして言語学に対する興味が湧きはじめ、次第に言語学の研究をしたいと思うようになりました。その中でも外語大に進もうと思ったきっかけとしては、上述の『フランス語学の諸問題』シリーズに見られるように、フランス語の言語学的な研究がよく行われているように思えたこと、またフランス語以外の言語にも興味を持っていた私にとって、様々な言語の研究者がいることや授業が開講されていることが魅力的に映ったことも挙げられます。

所属していた学部が言語学とはあまり縁のない学部であったことから、独学で言語学

の基礎を学習したほか、他学部で開講されていた言語学関係の授業に潜り込んだりもして、なんとか院試に合格し外語大の院に通うことになりました。

さて、私は「副詞的形容詞」と呼ぶ、形容詞から派生しているものの接尾辞-ment を伴わない副詞的語彙(parler plus fort の fort など)を扱っています。この分野の良い点としては、これまであまり興味を持たれてこなかったということが挙げられます。そのためブルーオーシャンであると言えるのですが、一方で問題がありました。どのような観点から分析を進めるべきかという事が一切わからなかったのです。よせば良いのにこのテーマを続けてしまい、コーパス(用例のデータベース)と睨み合ったり数少ない先行研究を検討したりすること早幾年。なんとか分析方法を見出すことができ、さらに数年の時間をかけてようやく博士論文の完成にこぎつけることができました。

博士論文を書いたことで達成感を得ることはできましたが、それでも研究者としてはスタートラインに立ったに過ぎません。これからも自身のテーマに関する知見を深めていくほか研究テーマの引き出しを増やすことも欠かせないといえます。ここにいる皆さまには足元にも及びませんが、少しでも前に進めてゆけたらと考えております。

第29回仏友会総会・講演会・懇親会のお知らせ

恒例の仏友会総会を下記の日程・要領で開催します(オンライン配信はなく、対面 形式のみの開催となります)。

<第 29 回仏友会総会・講演会・懇親会>

- 1. 日時 2025年4月20日(日) 14:00~17:00
- 2. 場所 主婦会館プラザエフ 4F「シャトレ」

東京都千代田区六番町 15 番地

最寄駅: JR 四ツ谷駅麹町口徒歩1分、

東京メトロ丸ノ内線・南北線四ツ谷駅徒歩3分

https://plaza-f.or.jp/access

- 3. 内容 総会(会務報告、会計報告、監査報告、役員改選承認ほか) 講演(詳細は下記参照ください) 懇親会(ビュッフェとワイン付き)
- 4. 講演内容 黒柳徹子さんが主宰する社会福祉法人トット基金事務局長の加藤紀子 さん(1975)と、入学同期で仲良しの泉登茂子さん(1974)との対談形 式で、2024年7月に開催された手話狂言パリ公演の動画紹介(約25分)

と、その実現までの苦労話をご披露します。フランス人も熱狂した手話 狂言とは、一体どんなものなのか?仏友会員にとっても興味深い講演に なることと思います。

5. 参加費 6,000 円を現地にて集めさせていただきます。

※今回より従来の通信費(1000円)はいただかないことになりました。 その代わり、イベントが赤字にならないためのカンパは大歓迎です。 可能な方は、ご協力のほど、是非よろしくお願いいたします!

6. 参加申込 メールでの参加申込は 3/21 (金) で締め切っておりますが、ご参加が可能になった方は下記宛てに 4/11 (金) までにご連絡ください。

宛先:山﨑るり子 ruche_blanche@yahoo.co.jp

CC:中村日出男 soleilvinum@gmail.com

【投稿のご案内】

デジタル版会報へのご投稿を歓迎します。文字数は 2000 字以内を目途に、テーマは自由です。次回の発行は 10/1 (水) を予定しています。ご投稿希望の方は、9/15 (月) までに幹事の中村宛てに Word 原稿をお送りください。添付写真がある場合は、1 記事あたり 2 枚まででお願いいたします。